



御おとづれ

美 知 代

御地はすでに木枯吹きやみ、音無き雪降りしきり、門外一步を出てられぬやう相成り候ふや、寒き寒き裏の二畳に一人さびしく暮らし玉ふを思へば、云ひしらず胸をいため申候、何卒餘りさまぐのこと御考へなされず、のどやかに御暮しのやう祈り入り候。小生はやうやく郊外に家成り、去る九日移轉仕り候、それにつけても昨年の冬、落合の賣家見にまかりしを思ひ出し、今、君あらばと妻と共に語り合ひ申候、はかり難きは運命に候ふかな、昨年の今頃、かくてあらんとは夢にも思はざりしものを、そのうち新築の家と共に寫眞撮りて送り上げ度く存じ居り候、電車汽車に近きところなれども、郊外は流石郊外にて、霜白く天高く、武蔵野の風、裏の榛の大樹をわたりて、おのづから自然の中の人となりたる如きを覺え申候、たゞ此頃の色とすべきは、此近郊の地多くは開けて新しき家屋しきりに建ち候爲め、野のところぐ大工の仕事小屋などたてられ、夜は彼等の夜仕事の燈火の光、さびしき闇の夜を隈取り候ことに御座候、また夜更けて、彼等の酔しれて歌ふ聲を聞くことこれあり候。今朝などの霜の美しかりしこと、日に溶けたる霧うすく立ちわたりて、村、家、林、皆畫の如きさまを顯はし、何と無く懐しの情に堪へがたく候

らひし。十日ほど前、飛彈の高山の生れにて、今年十七と云ふ紅顔の青年——名をなにがしと云ふ——小生をわざわざたづね來り、文學志望のよしにて、書生におきて呉れとのこと可哀想に存じ、玄關に置くことに致候。今度は一つ大に仕込みて、立派なるものにしたしなど熱心になり居申候、此の間の△△のものはその前のより餘程おもしろく拜見仕り候、文章もやゝ重みがつきたるやうに候。君の弊はあまりに輕捷なるにあり、流暢なるにあり、小生の文すでに其弊に困り居候ことゆゑ、成るべく小生の文など御参考にはなざるまじく候、句を煉ること、辭を豊富にすること、觀察を鋭くすること最も必要に候、何卒——あまり實際のことに執せず、世をはなれたる心になりて、文學の爲めに御盡しなされ度く祈り入り候。御母上には別に手紙さし出さず候まゝ、よろしく御傳へ被下れ度く候。書齋は北向きの六疊、西北と東南とに眩掛け窓あり、北の窓を明くれば、樺の大樹の風に鳴るを聞くべく、東南は日影暖にして、冬ながら春の心地致し候、例の書函に、君の置き行きし書箱を並べ、額は天下、和田、丸山の三箇、丸山のは御存じなきもの、晩春の竹藪を畫きたるものに有之候。

をして、いさゝかの御安心をして頂かうとはせず、此年月御こゝろをこめてのお世話甲斐も無く、却つて此様に苦しい、悲しい、言葉をお口に遊ばさなければならぬ様にいたしましたのは、皆な皆此妾の罪で、妾の不心得からて御座います。けれども先生免して被下さいまし、それは素より不束な妾の心からとは申ながら、これとても仕方無い、申譯らしうは御座いますが、申さば運命なので、妾とてもほんに思ひかけず何時の間にやら、四邊一面押し寄せた津波にかこまれて居りました、其時斯うしては濟まない、濟まない、先生に濟まない、甚麼に若しく、恐ろしく妾は思ひ亂れたて御座います、而もみすく其巨大な渦中に巻き込まれて仕舞ふよりほか、妾には如何する力も無かつたので、今から其頃のことを考へますと、今更彼様もしたら、斯様もしたらと、唯もうあさへされぬ涙で御座います。

それにしても羨ましいのは某と云ふ青年、朝夕を親しく御事へ申して、曾ては妾のして居たやうに、書讀みて、もの言いて御いて遊ばす御書齋にそと出入つては、神々しき迄の御横顔を見參らせて、さぞや人知れずの微笑もあらう、それを思ふといつそ妬ましいやうな、夢更ら某とやら其人の將來をのろふのではないけれど、つい淺間しいおもひも湧いて、明暮御忘れ申すひまとは無く、遣瀨無いかなしみの中にも、先生の御名を思ふとき、床しく嬉れしかつた過去を偲んで、云ひしらぬ力を身内に覺えもすれ、都に遠い、二百里を隔てた此片山陰で、幾ら戀し、御懷しを繰り返へしたところで、あゝそれが何にならう。それよりは、それよりは、假令此の世

さきの世、甚麼につらい思ひをしてもかまねない、出来ることなら、今一度御傍で叱られ度い。

一途に僕を嚴師とばかり遠慮しちや不可ない、慈母と思つて呉れ給へと世にもありがたひ御言葉、それはつい昨日のやうに思はれるのに、あゝ最早いつまた親しく承ることが出来るのか、先生先生、妾は何故いつまでも先生一人をお頼り申して、文學の爲め身も魂もさげ得なかつたのでせう。あゝ考へると口惜しう御座います、けれども先生、妾のしきたつた事は罪、罪でせうか、若し罪ならば此かなしみを甘んじて受けませう、けれども、けれども……あゝ妾の御心が解りません。何も何も餘り考へないでのごとやかに暮らすやうにとの御仰せ、妾も一生懸命左様したいと勉めて居るのですけれど、日毎日毎霏々として降りしきる雪に、見渡す限り野も山も枯れに枯れて、萬象殆んど生氣なく、永く寂しい田舎の冬はこれから始まるので御座います、あゝ、如何してものを思はないで濟みませう、實際に執しないで居られませう、どうせ妾は平凡な女、弱い意氣地の無い女です。ですけれども先生、これは皆妾の我儘よ。我儘とは知つてますけれど、あゝ、妾は先生の外に無理云つて泣いて頂く方も無いのですもの、堪忍して被下いまし、妾とて今日の悲境に自暴自棄して、此上先生を煩はさうとは思ひません。

謹賀新正と印刷された端書の上を斜に、懐しの御水莖一目見たまゝ、妾の胸はちどつて、先生、先生、もう——其様なこと仰つては、泣かしては被下いますな、でなくても甚麼にか御懷しう存じますものを。あゝ——